



価値観

山梨大学医学部外科学講座第一教室 教授
市川 大輔

新型コロナ感染の拡大により、人々の生活様式にさまざまな変化がもたらされている。会社ではリモートワークが主となり、医学会でも同じく、学会総会の現地開催が見送られ、完全 Web や Hybrid 形式での開催がほとんどである。学会のさまざまな委員会も Web 会議となり、私のような地方大学の人間にとっては移動の時間が大幅に節約され、時間に少し余裕を感じるようになった。

先日、久しぶりに出張があり、立ち寄った書店で手に取った百田尚樹著『新・相対性理論』を道中で読んだ。百田尚樹氏といえば、ご存じの先生方も多いと思われるが『探偵！ナイトスクープ』の放送作家として有名である。視聴者から寄せられたさまざまな謎や疑問をお笑い芸人が究明する番組であり、笑いの中に感動や涙もあり、関西では類を見ない人気番組の原点を築き上げられた。その後は、小説家として『永遠のゼロ』や『海賊と呼ばれた男』等のベストセラーも発表され、トーク番組で少々過激な発言もあるが、その独自の視点には定評がある。本書内容の詳細はぜひお読みいただきたいが、相対性理論といっても小難しい内容ではなく、「時間」を基準とした世の中のさまざまな事象に対する考察がメインテーマであり、「時間」に対する人々の価値観の違いや変化が面白おかしく記されている。その一つとして、医療や生活の変化によってもたらされた平均寿命の伸びによる現代人と昔の人々の「時間」に対する価値観の変化が解説されている。ここ 100 年あまりでさえ平均寿命が 2 倍以上に伸び、その結果、現代人の時間に対する価値観が少し下がっているのでは、とも考察されており興味深い。今

後、コロナ終息後の世の中がどのようなのか知る由もないが、私個人としては改めて限られた貴重な時間を大切に送っていきたくと考えている。

さとして異なる価値観を持っているものである。仕事とプライベートとのバランスや、仕事における新たな挑戦や安定志向、また、プライベートの過ごし方等、多種多様な価値観によって個々の思考や行動が規定される。私自身、京都から山梨に異動して本年度で 5 年目となり、南に富士山、西に南アルプス、北には八ヶ岳連峰を見ながら過ごす日々に関心を感じ、充実した生活を送っているが、先日、臨床実習の学生から「どうしてわざわざ京都から山梨に来たのか？」と質問を受けた。関西出身の学生であったと思うが、学生には都心部から仕事のために山梨に異動する気持ちが理解できないようであり、歳と共に変わる人生観の変化はともかく、まさに価値観の違いというところである。価値観の違いの最たるものの一つとして、さまざまなコレクションも挙げられると思う。もちろん、世の中には、万人が認める芸術性や希少性から高額で取引されているものもある。一方で、古い玩具やレコード、また、いわゆる骨董品の類については、所有者にとっては宝であるが、一般の人々にとっては古いだけでまったく価値を感じられないものも多い。

少し家族のことを書かせていただくが、私の親父は経済的にあまり裕福でない家庭に生まれ、中学卒業後に会社に就職し、その後は小さいながらも建材を扱う土建屋を自ら立ち上げて営んでいた。自身の経歴から、富裕と学問に対するコンプレックスは人一

倍強く、少し余裕ができてからは少しずつ骨董品の類いを国内外から買いあさり、暇な時は読書ばかりしていた。晩年に、もともと住んでいた奈良南部から奈良と京都の県境に移住したが、その物件は近い将来、リニア新幹線が大阪まで延伸する際に確実に価値が上がり、と信じて購入した物件であった。20年ほど前に亡くなったが、住んでいた家はしばらくそのままにしていた。家というのは人が住まなくなると荒むもので、時折赴いては草抜きや剪定などをしてきた。「この土地の価値はさらに上がるから所有しておくように」との親父からの遺言を守っていたが、やはり限界であった。家内と相談した上で売却することにし、幾つかの不動産業者に相談に行ったが、親父の当時の購入額と売却に際して算出された額の差を見て驚いた。算出される額が他の人々の平均的な価値観を基にはじき出されることを考えると、親父の価値観は一般的な価値観とはかけ離れたものであったのだろう。実際に、購入額の3分の1弱の額で売却することにしたが、最後に家の整理をしているとあらゆるところから骨董品やアンティークの類いが出てきた。家内に相談すると、「要らん」の一言で、まさに価値観の違いである。知り合いの伝手を頼って、写真をベースに簡易鑑定をしていただいたが、数千円と値段が付いているものは良い方で、そのほとんどはまったく値段すら付けられないとのことで無用の長物となった。一方で、幾つかについては比較的高額な値段が付く可能性を示唆された。家内も現金なもので、「要らん」ものが「要るやろ」に早速修正され、その要請に従って、せっせと自家用車で自宅に運ぶことになった。幾つかの絵画と西洋骨董を自宅に持って帰ったが、その中に憂鬱な顔をした少女の人物画があった。殺風景な私の貧乏宅には似つかわしくない絵画で、深夜遅くに疲れて帰って暗闇の中でその少女に迎えられると、少し「ぎょっ」とする神秘的な印象を与えるものであった。家内と再度相談し、亡き父との価値観の差という結論に至り、天を見つめ親父の考えに想いを馳せながら、さらにはわれわれ夫婦も後ろめたさがない方法として、親父の地元である奈良の県立美術館に寄贈することにした。それ以来、同美術館から毎年さまざまな展覧会等の案内や招待券等をいただき、親父を思い出す機会となっている

が、山梨に異動したこともあり残念ながら未だ一度も訪れることはできていない。

幾つかの親父の収集品は現金な家内の価値観に基づいて家に残されることになったが、その中に背中に羽根を生やした奇妙な人物（獣？）画もあった。先日、ふと大学の仕事部屋を見回した際に、空いた壁一面にあの絵画を飾ったら殺風景さが解消され威厳と高級感をもたらしてくれるのでは、とふと思った。しばらくして京都の自宅に帰省した際に、主がいなくなり物置状態になっている子供部屋からその絵画を出してきて鑑賞してみると、その奇妙な人物から躍動感と力強さを改めて感じ、仕事における自らへの教訓の意味も込めて部屋に飾ることに決めた。まじまじと見ていた時、画中の人物の股間に目が行った。「ん？」、芸術性高く陰部が描かれていた。私個人の考えとしては、最近、少し行き過ぎた感が否めないハラスメント問題であるが、受け側の感覚を基に判断するため、その絵画も明らかにセクハラの対象となり得るものであった。自らの仕事部屋が公的空間か私的空間か難しいところであるが、出入りされる機器・製薬関連の関係者、また、教室の秘書や大学・病院事務の方々等、女性も多く、また、最近では医学生や若手医師にも女性が増えてきており、個人の価値観の違いで済ませるわけにはいかず、仕事部屋に飾ることは断念した。親父のコレクションに追悼の意を込めて額縁を綺麗に掃除して再びお蔵入りさせた。それからまた数か月、京都の猫の額ほどの拙宅であるが、息子たちが無事大学も卒業し就職したことや、初孫ができたこともあり、リフォームをすることにした。最初は、簡単な修復程度と思っていたが、家内の膨らむ妄想によって肝臓移植・腎臓移植程度の大規模リフォームと相成った。一か月以上にわたり工業者が入るということで、家の押し入れ等の整理をしたが、親父の自宅で見つけて持ち帰った西洋骨董の一つが大事に包まれた状態で出てきた。改めて見てみると、草花や生物が生き生きと繊細に施されたガラス工芸は、最初は興味を示さなかった家内も魅了し、お気に入りの一つになっていた。工事の際に邪魔にならないように家内の実家に運んだが、運んでいる途中にふと中を見てみたところ電球とスイッチを発見した。目を凝らしてみたところ、「切」の文字

が読み取れた。「はてさて、西洋骨董の中に日本語？いやもしかしたら中国語？」と、どうでも良いことを考えつつ、少なくとも西洋と東洋の混在の妙を感じながら、良く言えば家内の価値観が変わらないように、別の言い方をすると知らぬが仏と思いながら、そのスイッチ部を外から分かり難いように隠しておいた。

さて、癌病態治療研究会では、癌病態に関するさまざまな研究が行われ、その知見に基づく新たな治療に関する試みも発表され、毎年、活発な議論が交わされている。近年、臨床試験至上主義の風潮があり、極めて多数例を対象とした大規模臨床試験では2～3%程度の結果の違いでも新たな標準治療と位置付けられることもある。外科領域では、鏡視下手術が普

及し、開腹・開胸手術と遜色無い、もしくはそれ以上の手技も可能となり、エキスパートの手術手技はArtとしても美しく、若手外科医を魅了している。もちろん、きっちりとした手技を習得し、その上で手術を行い、随時更新されるガイドラインを常に認識しながら治療にあたることで十分であるが、私自身は、価値観の違いといえどもそれまでだが、根底にある癌病態をできる限り理解した上で治療に携わりたいと常々考えている。手術手技向上に対して努力をする一方で、今後も引き続き本研究会を通してさまざまな観点から癌病態を学び、手術や薬物療法に際して、個々の癌細胞を心眼で見つめつつ、また、癌病態に想いを馳せながら、一期一会の治療に臨みたいと思う今日この頃である。